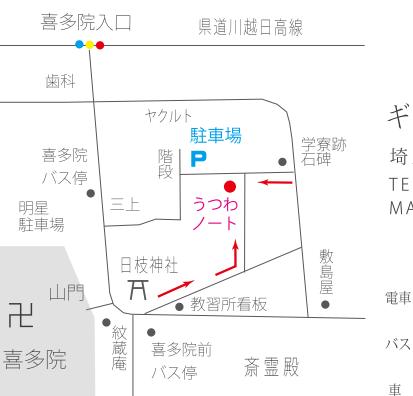


料金後納
ゆうメール



7.5 高さ4cm



ヤラリーうつわノート
玉県川越市小仙波町1-7-6
TEL 049-298-8715
E-MAIL utsuwanote@gmail.com

プロフィール
1958年 愛媛県松山市に生まれる
1978年 岡山県備前にて修業
1980年 沖縄県知花にて修業
1982年 常滑にて鯉江良二氏に弟子入り
1985年 愛知県常滑市にて独立



2 奥行12cm

るがゆえに、第三者に分かり易い普遍性が求められる。この平成の間に作家が作るうつわを取り巻く環境は大きく変化し、うしに寄り添うことを正しい価値として認識されてきた。小野哲平もまた若い頃の表現的なうつわから調和的なうつわ表現的な作り手ではないだろうか。しかし、一方でものを生み出す原動力には既成価値を破壊しようとする反作用もある。されば、顕著にパンクな姿勢を見出すことができる。その意識は現在のうつわ作りで消え去った訳ではないが、ことさらその意識を隠すかのようにうつわは現れる達成感をもつてゐる。なぜかと

分かりの良い工芸の状況を見るにつけ、その枠組みで価値づけられる事への違和感が強く生まれているようだ。今回、「重厚」で歩み寄らない「うつわ」を提示して欲しく要望を出した。それが約1年前であったろうか。2017年の個展では継ぎ、それに用途を併せて欲しい旨の短絡的な考えであった。その意図を彼なりに咀嚼し、形として提示されたものである。見て分かる通りそれは「うつわ」の姿をしておらず、要望とはかけ離れた姿ゆえに当初は戸惑いの中にあった。

これはオブジェとして提示されたものではなく、親和的に解釈されがちな自己の「うつわ」に対する反動であるだろう。それは明らかに「うつわ」の文脈と同一線上にあり、その根幹と表裏一体を成すもうひとつの姿なのだ。そこに共通する言葉を借りるなら、「衝動と暴力性」。ものを作るうえで大きな動機づけになるパッション。そして抑えきれない暴力的

き出す、ある意味で危うい思いを安定させるために噴出口でもある誤だ。



幅5 高さ4.5 奥行6cm

彼とのやり取りを一部紹介する。「若い時代から今も続く自分の内面の暴力性との折り合いをどうつけるか。粘土の肉感、それを鋭利な刃物で刺した時の感触。巨大な炎を操り興奮したい。しかし、コントロール出来ない時の恐怖。自分の衝動を疑似的な行為で変質することで、この社会に存在出来たと思っている。」また「この仕事を選ばなかつたら犯罪者になっていたかもしれない。この仕事を通して自己の快楽を昇華することで社会的に無害な存在になっているのではないか。では、なぜ無害だけに満足せずに社会的に有益な意味を求める統計学者のもの。それが其他の」と印と世界を見越す者を信じたい。ううう、この小野薫に彼のもの作りの私機が垣間見えていて

さて、今回の作品。焼き物本体に絡む針金の存在が特徴的だ。貫通したもの、不安定なもの、あるいは拘束的なもの。いずれも彼の精神状態を暗示しているように見える。先の言葉通り、内面から発する衝動が、ものづくりの動機であるならば、「うつわ」は単なる従順な道具ではなく、心からえぐり出されたどろりとした塊のようなものである。作り手の内面に潜む暴力性。破壊、快楽、そして救い。その作品評価は未知数であり、存在もまた未定義である。しかし、どう解釈されようとも既にここに生れた。どこにも納まろうとせず未解釈のままここに在ることに意味がある。1980年代、まだ陶芸が大いに権威主義的な時代から挑戦をもって「うつわ」の時代を築いてきた第一人者である。今「うつわ」を取り巻く環境は認知され平準化された。奇しくも平成最後のこの時に、「衝動と暴力性」を掲げた「作品」を提示することは、次の時代に向けた覚悟でもあるだろう。これを見ずして、触れずして、語ることなかれ。自分自身の体験として記憶に留めて欲しい。